

語り聞くパイロットファーム

帝国主義と民主主義：拓殖実習場

第3回

東北大学大学院情報科学研究科准教授 徳川 直人

う基本姿勢となつたにちがいない。実際、彼が配属された地区では共同関係が幾重にも張り巡らされた。

死者との対話による節度や礼節も生きていた。「特攻で同級生が何人も死んだ……もうエンジンの付くものには乗らないと決意しました。それが亡くなった人への心づかいであると自分に言い聞かせているんです」。農業における「機械」の登場はパイロットファームの大きな意義であるが、しかし、人間は近代的なものや合理的なものをただ喜んで受け入れるだけの存在ではないということも忘れてはなるまい。

時代は「逆コース」とも言われた当時、改めて民主主義とは何かが問われていた。何をどうすることが民主主義なのか。軍国主義はもうたくさんだとしても、戦勝国が敗戦国を一方向的に裁き、西洋かぶれが日本的なものや過去を断罪するばかりでは、新しいものを建設する具体像に欠ける。「心の行き場」を失っていた青年も多かった。そんなとき「4日クラブの綱領を繰り返し読んだ俺は、これは少し違う世界だ」と思った。いわく、私たちは、実践を通して自

らを磨くと共に互いに力を合わせて、よりよい農村、よりよい日本を創るため、四つの目標を掲げます。一、私たちは、人のため社会のためになる、農業の改良と生活の改善に役立つ腕を磨きます。科学的にものを考えることのできる頭の訓練をします……。これが民主主義なんだ」。

異なる来歴と個性そして思想を持った入植者たちが初めて出会ったのが「拓殖実習場」だった。拓殖実習場は、北海道特有の農業技術を伝授し、開拓者精神を涵養するために設置された道立の施設で、十勝、北見、釧路、手塩、中標津の5ヶ所にあつた。十勝が最初で1932（昭和7）年の設立。パイロットファームへの昭和31年入植者は釧路、32年入植者は十勝、33年入植者は釧路の実習場で、学課と実習、各200時間のプログラムを課されたのであつた。その内容は総合的かつ実践的なもので、酪農技術、経営から、組織、パイロットファーム事業、営農設計、保健衛生、根釧の気象や土壌などに至り、炊飯や家族計画まで含まれていた（ただし、31年組が45日、32年組が30日、33年組が20

戦前・戦後とよく言い、何かと対比されるが、両者は切れながら連なり、連なりながら次第に切れてゆく。パイロットファームの時代とは、それがよくわかる頃でもある。そのことが入植者たちの経験史にも表れている（前回参照）。「昭和17年、南太平洋で熾烈な戦闘がくり広げられている頃、「のちにパイロットファーム開拓農協の営農生産部長となる」Y氏と知り合う。彼は山砲、自分は船舶隊、翌18年2月ガタルカナル島の撤退作戦でお互いに命拾いをした仲間である。中春別での再会、懐かしさがひとしおであつた」。「空しさや無力さを感じながら、郷里に引き揚げてきたが、終戦の混乱期の中であれこれと職を転々……なかなか内地の生活になじめず、また仕事にも失敗し思案に暮れていた矢先、ちょうど在鮮時代の友人からの手紙で当地のことを知り……」。

これらのエピソードが物語るのは戦時の縁や人脈がまだ生きていたということだろう。「軍隊あがりのこわい人がいて、役員選挙などではそういう人を選けたんだよ」といつた述懐がある。

日と、次第に短縮されていった。全寮制で、すべてが集団行動。やんちゃ合戦もあればぶつかりあひもあつた。——「初対面の仲間ばかり、日ごと親交を深めつつも個性を剥き出しにして帝国主義と民主主義のあいだを行きつ戻りつ」。日常の関係について、時代を表現する言葉が使われている。

拓殖実習場自身が戦前と戦後の連続性を体現していた。実習場の開設に尽力し、初代場長となつた松野傳は、後に奉天農業大学教授となり、満洲開拓に北海道農法を導入した指導者である。パイロットファーム研修時、実習場教官には満洲帰りが多かつたという。外への拡張主義と、それが頓挫した後の内的開発のあいだに、環流関係があるわけだ。松野が作詞した拓北会歌の一節には「護国の血潮

火と燃えて」とあつた。その部分が戦後には「平和の光り 身にうけて」になる。——「帝国主義と民主主義のあいだを行きつ戻りつ」とは、戦前と戦後とのこういつたオーバーラップと転換を言い当てているかのようでもある。

さて「戦後」とは、法律で定められた制度的な年号ではないし、

今日、戦争や帝国主義時代の経験といえ、いかに語り継ぐかという話題になりがちであろうが、当時は、その時代の経験者が現役の働き手として家族や近所におり、その人々の行動基準や心の傷と一緒に生活したり活動したりするのが常だったのである（ただし、経験を当人が語っていたとは限らないだろう。加害にせよ被害にせよ痛ましい経験の多くはむしろ個人や家族の中に封印されていたのではないだろうか）。

価値や思想にしても、人はそれをそう一朝一夕に入れ替えられるものではない。とはいえ、人はただ過去を引きずるだけの存在でもない。その時代の価値や思想を主体的に解釈し直して、新しい時代に対処することもある。

「全員で生きのびるためには、個人が好きとか嫌いとかいうのではなく、互いの機能をおりあわせなくてはいけない。軍隊ではそれを学びました。利己か利他かではなく、皆で生き延びるのでなくては、自分も生存しえない。そう換骨奪胎されている。この原論が、入植後の営農においても、選別や競争を強いてくる情勢に立ち向か

封建時代とか近代といった歴史学的な区切り方ともちがう。いわば「社会的に区切られた歴史」だしかもそれが世界的に広く共有されている。こんな現象は人類史で初めてかもしれない。かの戦争がそれだけの一大悲劇だつたということだろう。その教訓をたつた70年で忘却してしまうとしたら、もちろん、愚かなことだ。だが、過去の教訓に未来への内実を与えるには、新しい暮らしを構想する想像力や創造力、それを求める渴望を、いまいちど思い起こしてみるべきなのかもしれない。

（インタビューによる当事者の声）が今回には含まれております。お名前を挙げておりませんが、ありがとうございました。



写真 釧路拓殖実習場
（弟子居にあつた。三角屋根は赤）